慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	田口憲一著 大企業は暗躍する
Sub Title	
Author	佐藤, 芳雄
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.10 (1962. 10) ,p.958(100)- 959(101)
JaLC DOI	10.14991/001.19621001-0101
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19621001-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

的な意図のもとにかかれている。だからこの本は、権威をうちたてるためではなく、「社会における人間のあり方」について読者をいや応なく、自分自身で考えさせるべくかかれた、といってもいいだろう。

その特徴的なあらわれの一つは著者たちが近代社会の基本構造を把握するために、体制、民族、階級の三つのカテゴリーをとり上げ（一〇頁）、それぞれに対応して社会思想史を三つの解放に区分して考察していることである。第一部は人間の解放、第二部は民族の解放、第三部は階級の解放である。（体制と人間がどう関連するのかは明らかでない。なお、その他に、体制、段階、状況の三つのカテゴリーがあげられ《三五八頁》ている。）もちろんこれらは無関係のものではなく、歴史的段階、国によってそれぞれからみあったものである。そして現代に生きるものは、これら三つのカテゴリーのもつ歴史的意味を、主体的に体得しなければならないことを説かれるだろう。人間、民族、階級、たしかにこれら三つのカテゴリーは、歴史がわれわれにのこし、また、現実が日々われわれの眼前にその解決を迫っている問題であることは疑いえない。読者はそれについて考えざるをえないだろう。だが、これら三つのカテゴリーを社会思想史の基本的なカテゴリーとしてえらび出すこと自体には問題があると思われる。それについて論ずるのは紹介の域をこえるが、むしろ、それに関する成果ある論争こそ、この共同著作の期待するところであろうことをつけ加えたい。また本書は、時に応じて利用すべき本としても、巻末の参考文献とともに、社会思想史を学ぶ意志のあるものにすすめたい。（岩波書店・A5・三八七頁・六五〇円）

—野地　洋行—

＊　＊　＊

田口憲一著

『大企業は暗躍する』

大企業は「現代のリヴィアザン」である。われわれの生活は、直接間接に、大企業の網のなかに組みこまれており、その支配のもとにおかれている。生産力の強力な担い手として、大企業は、「正直爺さん」をよそおい、われわれのまえにその素顔を現わさない。

本書では現代の企業がもつ〝五つの顔〟が扱われている。プロローグ（五つの事件の企業史的背景）、エピローグ（五つの事件の意味と性格）を前後にして、独占（史上最大の反トラスト裁判）、乗取り（買占めをめぐる米英二社の死闘）、談合入札（大電機メーカーのなれあい）、特別背任（会社首脳部の計画的汚職）、詐欺（今世紀最大の株式詐取事件）、の五ケースが、オムニバス形式のノン・フィクション経済読物として書かれている。

アメリカの石油・アルミ・電機・自動車・証券における各事件史が『大企業の暗躍』としてとらえられ、扱われる問題領域は広い裾野をもっている。独占と競争、独占価格設定、プライス・リーダーシップ、コリュージョン、資本集中戦術、秘密カルテル、企業組織と個人、「ホワイト・カラーの犯罪」、大企業の官僚制と非情、擬制資本と射倖心・詐欺、等々、総じて、アメリカの誇る自由企業体制の日蔭にあるいは日向に生まれた諸現象が、「暗躍」のなかに含まれている。それらを通じて、われわれは、非情な資本が人間に強いる異常な行為をなまなましく知らされる。そして、公的・私的「犯罪」と背なかあわせの現代人、つまり、われわれ自身をそこに見出すのである。

現代資本主義の「繁栄」の反面に資本主義の腐朽化の深化がある。ここに描かれた大企業の素顔は、いわゆる産業もの・経済ものとして、興味本位の読物に終ってはならない。また、アメリカという彼岸の出来事として片づけられてはならない。現代独占資本主義の経済法則を究明する過程で、そこに必然的に生成する、資本家、経営者、ホワイト・カラー、寄生インテリ等のいわば「限界状態」における思想と行動の非人間性を、われわれは仮借なく告発しなければならない。その意味で本書はポピュラーな形での重大な問題提起の書である。ただ「理論的総括」をめざした前・後の解説は、それなりに示唆にとむものではあるが、いわば作家と評論家の混在となり、かえって論告の鋭さを減じているうらみがある。（新潮社、ポケット・ライブラリ、一九六二年六月刊、二九〇頁、二二〇円）

—佐藤　芳雄—

＊　＊　＊

向坂逸郎著

『マルクス伝』

（『マルクス・エンゲルス選集』13）

わが国にマルクス主義が導入されて以来、マルクス自身による『共産党宣言』、『資本論』をはじめとして、はたまた最近の『経済学・哲学手稿』等、幾多の著作が紹介されてきた。それと同時にマルクスの六〇余年にわたる生涯や、その間における彼の思想的発展などが明らかにされてきた。しかしながら、それらの企図は、マルクスの著作の未開発や、日本のマルクス主義がその半世紀以上の歴史のなかで直面した弾圧政策のために、十二分の成果をあげたとはいえなかった。その間、諸外国では、とくにモスクワのマルクス＝レーニン研究所などを中心に、マルクスのうずもれた諸資料の発掘がさかんに行われ、マルクスの生涯・思想学説発展研究の分野では急速な進歩がみられるに至った。とくに今世紀に入って明らかになった『ドイツ・イデオロギ』、さきに掲げた『経済学・哲学手稿』を中心としたマルクスの初期（一八四〇年代）の抜萃帳などの発見は、マルクス主義に一層の確固たる基礎を提供することになった。また同時に、マルクス主義の生成史に論究欠くべからざる研究分野をつくりあげてきた。今日われわれが「初期マルクス研究」と呼んでいるものは、このようなマルクス主義の生成過程に現われてくる思想的諸問題をとりあげ後期「資本論」を中心とした時代との体系的発展過程を問題としているのである。従って、マルクスの生涯を描こうとするならば、そのことはたんに通俗的方法による「伝記」の域を一歩出た、思想的な発展と密着したところで「伝記」を書くということになる。あるいは、「伝記」を「伝記」そのものとして読者に提示するのではなく、マルクス主義の体系的理解を可能にするような基盤を与えるものとして提示しなければならない。従来おこなわれてきたメーリング『カール・マルクス——その生涯と歴史——』、リャザノフ『マルクス・エンゲルス伝』がマルクスの思想発展研究のうえでつねに問題にされてきたのは以上のような意図で「伝記」が書かれているためであろう。現在、徐々に刊行されている、A. Cornu, Karl Marx und Friedrich Engels, もまたその意図において同様であろう。他国に類をみない永い歴史と高い研究水準を有するわが国のマルクス主義も、いつかは独自な「マルクス伝」「エンゲルス伝」をもたなくてはならなかった。

本書はまさにかかる状況のうちに投ぜられた、わが国の本格的「マルクス伝」の最初の一石としての役割をになったといって過言ではなかろう。向坂氏の今日までのマルクス経済学者としての多方面の活動をもってすれば、「マルクス伝」はなすべくしてなったともいえるかもしれない。とくに、近年の労働運動の中でかなり重要な位置にあって活動されていた氏が、マルクス伝を通して主張したいと考えていることが、明白に感じとれる。とくに第一章から第四章にかけてのマルクスの青年時代の描写のなかに読みとることができるであろう。そこでは、マルクスが革命家としての基礎を築き、思想的出発をした青年時代における彼の人間像を通して、理論と実践の統一を心がけ、たえず現実的なもののみに関